

# 始まりの時

魅力づくりは  
試行錯誤から



下斗米孝喜さん、辰子さん(右・山形町)宅に民泊した仙台市立茂庭台中学校の6人。自然な表情は心が通った証しです(5月16日)

## 気付く機会提供を

地域の自然や暮らし、そしてそこに住む人との交流を通して、都会に住む子どもたちに、自然や人とのつながりの大切さに「気付く機会」を提供する教育旅行。5月だけで仙台市や首都圏から中学校8校、1434人の生徒が久慈市を訪れました。

旧山形村で教育旅行の受け入れを始めたのは、平成17年のことです。今では、受け入れきれず、学校に「お断り」を入れなければならないほど、人気の教育旅行ですが、今に至るまでには、さまざまな試行錯誤がありました。

## 課題から努力実る

旧山形村が、教育旅行の受



強い思いを込める清水会長

人を呼べる  
と信じた

け入れに向けて取り組み始めたのは平成11年から。人口減少が進む中、都会から人を呼び込み、交流人口を拡大させることによって山形を元気にすることが目的でした。

旧山形村長で、ふるさと体験学習協会の清水恭一会長は当時を振り返ります。

「人も自然も先人から受け継ぐ暮らしの業もある。磨けば必ず地域の宝になり人を呼び込めると信じていました。しかし学校に旅行先を紹介する旅行代理店には全く相手にされません。施設や体験の充実、山形特有の魅力づくりなど、課題は山積みでした。」

各地区で話し合いを持ち、魅力となりうる資源の掘り起こしを行った後、東京都小金井市からの参加協力を得て、平成12年からシラカバキャンブ(平成13年からバッテリー

# 教育旅行の ススメ

5月、教育旅行で仙台市や首都圏から1,434人の中学生が久慈市を訪れました。学校はなぜ久慈市を選ぶのか。さらに教育旅行を盛り上げるために必要なこととは何なのか。今回は教育旅行について考えます。(5ページまで)



民泊について語る出町会長

民泊は心と  
心のふれあ  
いです

キャンプ)を始めました。さまざまな自然体験をキャンプの参加者に提供しながら、経験を積み上げ、体験内容の充実とインスタクターの養成を進めました。

平庭高原にコテージ10棟、内間木洞周辺も整備するなど施設や環境も整えました。広大な村有林を生かした林業体験を核として、山形特有の「売り」も確立しました。

努力は実り、山形を教育旅行先として紹介することを旅行代理店が約束。旅行代理店と協力した誘致活動により、平成17年5月12日、仙台市から最初の中学校が山形を訪れました。

## 民泊で増した魅力

久慈市の教育旅行で、さまざまな体験とともに欠かすこ

とができないのが民泊です。平成17年に山形村民泊研究会(現・いわてやまがた民泊研究会)を立ち上げた出町丈夫会長は語ります。

「わたしは以前から山の中に人を呼びたいと思っていました。でも役場から、地域をあげて民泊を進めると聞いたときは驚きましたね。『本気か』と正直耳を疑いました。不安をよそに、飾らない姿勢で生徒を迎え入れる民泊の評判は上々。民泊希望は増え続けあつという間に教育旅行のメニューに定着しました。」

「民泊は心と心のふれあいです。はじめ7、8人だった会員は今では約30人。人の輪が広がり、地域の活性化にもつながっています。」

民泊の成功によって、教育旅行の魅力は大きく増してきました。

